# 埋甕集団の構成と婚姻システム

丹羽佑一

## 一　はじめに

本稿は、縄文中期後半の屋内埋甕をとり上げ、その横築方法を分析することによって、埋甕という活動形態[一]をとった集団の構成と当時の婚姻システムを明らかにするものである。

それでは、「埋甕」とはどの様なものであろうか。次に従来の研究を紹介し、埋甕を概観してみよう。

(a)　**従来の研究**[二]　従来の研究は、幼児埋葬器論[三]、胎盤収納器論[四]、建築儀礼用器論[五]の三つに整理できる。

幼児埋葬器論は、埋甕の大部分が住居出入口推定部[六]に見つかることより、埋甕は人の出入の激しい場所にあって、人々に跨がれるもの、との規定と、死亡した幼児の魂を母親の胎内に転生することを希望して、炉の下、敷居の下等、母親がその上や近くをよく跨ぐ場所に幼児を埋葬する民族風習が存在すること、この二点より成立している。

胎盤収納器論は、幼児埋葬器論同様の発掘所見への規定と、後産を人の出入の激しい所に埋め、よく踏んでもらうと、幼児自身も元気に育つ、という民俗感染呪術例より成立している。以上二つの論議は、いづれも埋甕なる遺構の多くが入口部にあるという空間特性を重視しているのである。

一方、建築儀礼用器論は、神奈川県川崎市潮見台遺跡中期後半の屋内埋甕の構築方法の分析より出されたもので、その根拠は、埋甕の構築が住居の炉や柱と同様に、住居の新、改築の際に予じめ予定されているところにある。住居の新、改築にあたって、埋甕が出入口部に構築され、その内に供犠された動物や、供進された食物が納められ、建築儀礼が遂行されたのではないか、としている。又、その出入口部に在るという空間特性に、住居の「踏みこらし」という建築儀礼を想定している。この論議は、埋甕の構築される「時」（時間特性）を分析した点が特徴である。

以上、「埋甕」に対する三つの論議を紹介した。これらの当否は、埋甕の機能を容器としている以上、その内容物の如何によっている。これは発掘調査の成果を待たなければならない。又、前二者の成立においては、民族学、民俗学等関連学援用上の問題を考慮しなければならない。[八]建築儀礼用器論は、改築による埋甕保有から喪失への、又その逆の変遷への解釈等、諸遺跡において住居構築のあり方と埋甕構築の関連性を検討しなくてはならない。

これら三者は、埋甕機能の復原を目的にしているが、本稿の目的

考古学研究室（昭和55年9月30日受理）

は、「埋甕集団」及びその「構成」の復原である。確かに、幼児埋葬器論、胎盤収納器論では埋甕祭式の主役は母親であるが、これは民族誌例、民俗誌例からの類推である。土器はそれ自身では埋甕にならない。集団所究が必要な所以である。それでは、埋甕から如何にして埋甕集団及びその構成の復原が可能か。(b)　分析方法　(i)　資料の条件

(ii)　基礎となる考え方と分析方法の二項目を設けて論じることにする。

(b)　**分析方法**

(i)　資料の条件　「埋甕」と呼ばれているものには、屋内、屋外の別があり、屋内においては、奥室、炉辺、側室、前室、入口部に分かれ、(え)土器の埋け方においては、天地をそのままにする「正位」と、天地を逆にする「逆位」がある。その土器の形をみると、口縁を欠くもの、胴上半を欠くもの、胴下半を欠くもの、底部を欠くもの、底に穿孔をもつもの、口縁も底部も欠くもの等多様である。石蓋を持つものもある。時期をみると、縄文時代早期後葉に一例あり、(一〇)中期に至って盛行、後期中葉まで続く。地域的にも現在、東北地方から関東、中部、北陸、東海、近畿東部に拡がっている。この様な状況では、「埋甕」一般を語ることは不可能である。埋設土器の形態に至るや、一遺跡一時期においても多様なのである。

ところが、一つの活動は、現象的には限定された時間、空間、資材、集団の結合によって成立し、特定の形態として残存する。この活動に特定の形態を与えるものが、(一一)活動の目的と伝統・地域性なのである。すなわち、諸目的の錯綜が形態の多様性と映り、諸伝統・地域性の重複が多様性を助長する。よって、適切な視点に基づいて特定の形態を抽出し、それを目的（機能）、地域、時代に対応させ得るならば、我々は特定の活動の存在、その伝統・地域性を把握し得るであろうし、(一二)当然各々を担う集団を想定できる。

しかし、これらの人々の「まとまり」とは一体何であろうか。まず言えることは、彼らは活動を直接行なう集団としてではなく、活動の存在と目的とを知っており、その方法を一定の時空の拡がりにおいて共有する集団としてある、ということである。その時空の拡がりは、集団の意志ではなく、(一三)結果としてもたらされたものであろう。したがって、これらの拡がりは、縄文文化を考える上での「埋甕」という遺構概念の規定に必要となるものである。しかし、その拡がりにおいて捉えられる人々のまとまりは、活動する集団としての実体を欠くものといえる。これは、我々が問題にする、埋甕を構築し、使用し、廃絶する集団ではない。「縄文文化」を創った人々ではなく、遺跡を創った人々でもなく、そこに足跡を残した人々を必要とするのである。

我々は、遺跡から得られた結果を遺跡に還元しなくてはならない。我々には、埋甕の分布を覆い尽くす膨大な資料ではなく、埋甕を構築し、使用し、廃絶する、その過程を明確にし得る資料を必要とするのである。

(ii)　基礎となる考え方と分析方法　私は先に、一つの活動は、現象的には限定された時間、空間、資材、集団の結合によって成立し、特定の形態として残存するが、この活動に特定の形態を与えるものは、活動の目的と伝統・地域性である、とした。この考え方をさらに進めると図一になる。すなわち、或る集団（母集団）に一つの目的が発生すると、彼らは周囲に在る全ての資材、時間、空間から、その目的に見合う資材、時間、空間を選択する。又、選択は彼らの環境だけではなく、彼ら自身にも行なわれる。一つの目的に見合う人員の選択である（以後、基になる集団を母集団、選択された人員のまとまりを目的集団とする）。　目的集団も又、時間、空間をその属性として合わせ持つ。以上が活動の第一段階である。そして、この資材、資材の所在を

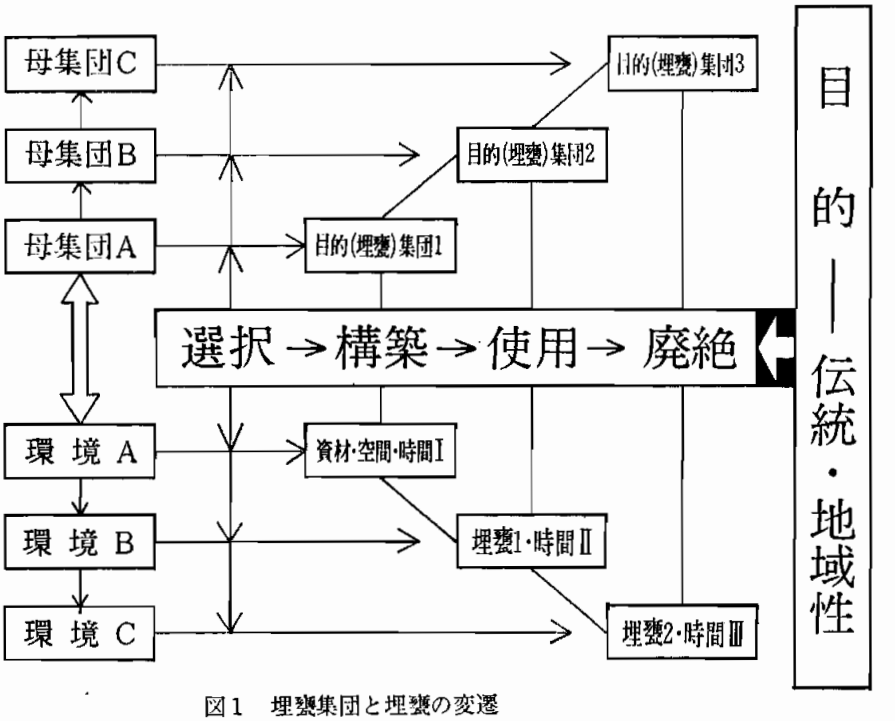



図1　埋甕集団と埋甕の変遷

示す時間、空間と、目的集団とその所在を示す時間、空間、これらが一対一に対応した時、活動の第二段階が始まる。ここにおいて、活動は資材の特定の形態に変換される。次いで、第三段階の使用、第四段階の廃絶と続き、目的は達成される。なお、重要なことであるが、第一段階の選択、第二段階の資材の変形、第三、第四段階の活動の方法を決定するのは、目的であり、伝統・地域性なのである。

以上が、目的の発生から達成における資材、時間、空間、集団の関係である。これより次の事柄が導かれる。すなわち、母集団からの人員の選択は、目的集団の構成を指し、それは環境からの資材、空間、時間の選択に対応する。又、目的集団は資材、空間、時間の結合した特定の形態に対応する。したがって、「集団」は特定の形態をした遺構、或いは遺物として捉えられ、その「構成」は特定の形態を構成する資材の形、空間、時間の特性によって知ることができるのである。

しかし、埋甕なるものは、当然ながら人々のあつまりではない。その活動の結果が埋甕として残存しているにすぎない。それでは、埋甕集団の実体は、どの様にして把握できるのであろうか。

上述してきた考え方の基本に母集団がある。埋甕集団という一つの目的集団は、母集団から選択された。したがって、母集団の実体とその選択の内容がわかれば、埋甕集団の実体が把握されるのである。まず母集団について検討してみよう。これについては、埋甕が屋内にあるところから、埋甕構築住居構成員を想定できよう。さらに関連して重要なことは、埋甕を構成する諸要素―埋設土器、時間、空間の環境に住居の構成諸要素を想定し得るということである。したがって次の問題、「選択の内容」は、以下の様にして求められる。すなわち、「選択の内容」は、埋甕構成諸要素の特性によって示されるが、その特性とは、住居構成諸要素と埋甕構成諸要素との関係として捉えられるの

である。

以上、本稿の目的、分析方法、基礎となる考え方を述べた。次に、天竜川水系諸遺跡をとり上げ、具体的に埋甕集団について分析してみよう。

## 二　天竜川水系諸遺跡の分析

### (a)　増野新切遺跡（長野県下伊那郡高森町）[一五]（図二～五）

(i)　遺跡の概観　本遺跡において中期前半の住居址一一基、後半の住居址七六基が検出されている。[一六]しかし、これは南北に弧状に連なる住居址群の中央部の調査結果であり、その全容は明らかでない。埋甕[一七]は、中期後半の三三基の住居址から検出されており、時期別にみると、Ⅰ期〇、Ⅱ期一一―二一（二一基中一一基が持つ）、Ⅲ期二一―二九、Ⅳ期一―一九、となる。しかし、住居の全容が不明の為、分有関係は明確でない。よって、主に埋甕の構築空間、時間、埋設土器を観察する。

(ii)　構築空間　埋甕の構築空間を観察すると、入口部（四三例）、奥室部（一例D一五号）、炉辺奥壁側（一例D一〇号）、右側室部（二例B二七号、D二九号）、左側室部（三例B二六号、D四四、四六号）、となる。

以上は、本遺跡の住居床面に穴を掘り、土器を埋設した遺構全ての位置を検討した結果である。大部分のものは、入口部にある。しかし、少数であるが、奥室や左右側室部にも存在する。「埋設土器の形態」の項においても述べるが、入口部のものは正位、左右側室部のものは底部穿孔逆位で「伏甕[一八]」と呼ばれるものである。奥室部の二例は正位であるが、床面にあけた穴が浅く、土器を埋設したというより、据えた型になっている。したがって埋甕ではない。この様に、空間の差異

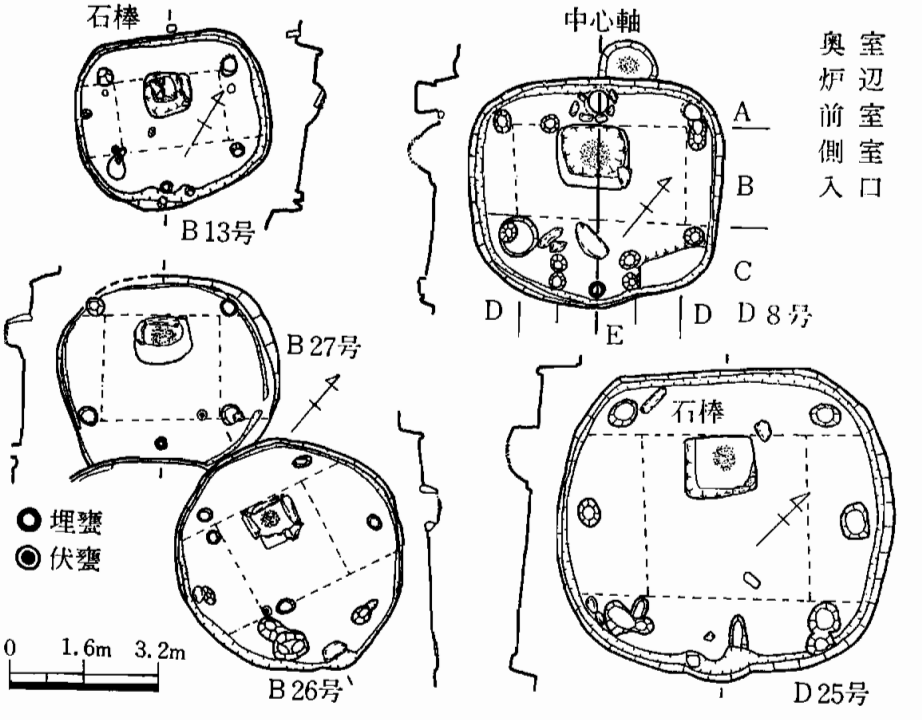



図2　増野新切遺跡屋内空間の分割（点線は15文献に加筆したものである）

と埋設の方法の差異が厳密に対応している点が注目される。なお、以上の観察から、「埋甕」と呼び得るものは入口部にあるものだけである。

(iii)　構築時間　埋甕と時間の関係を、各住居の改築と埋甕構築のあり方を中心に観察すると、次の三つに分けられる。

(1)　新旧両床面に各々埋甕が構築される。D一、(二)、一四号（以上は改築において住居中心軸の移動がみられる）、B一一、二五号、D一三、三二号（以上は改築において中心軸の移動はない）、の住居址にみられる。新旧埋甕の配列は、前者において各々の住居中心軸上に別れて在り、後者においては中心軸上に古いものから新しいものの順番で内から外に直列に並ぶ。(1)の場合は、この様に次々と埋甕が構築されていくのであるが、新旧複数の埋甕が共存するのかどうか、次に検討してみよう。その資料として、(イ)　貼り床の施工、(ロ)　石蓋の設備、を挙げることができる。(イ)についてみてみよう。D一三、一四、三二号、B一一号の古い埋甕には貼り床がある。一方、B二五号、D一号のそれには貼り床が無い。このことから、前者においては、旧埋甕は、遅くとも改築時に廃絶され、改築後の新埋甕とは共存しない。後者においては共存の可能性がある。次に(ロ)についてみてみよう。D一四号では新しい埋甕に石蓋が伴い、古い埋甕には貼り床が施されている。ところが、D一三号の新旧三つの埋甕では、中間期のものに石蓋が伴い、新古のものには、埋土、貼り床が認められる。埋甕が容器の機能をもつと仮定すると、石蓋は当然機能中の埋甕に伴う。D一四号のあり方は、これを肯定する。よって、D一三号のあり方は、中間期の埋甕が新しい埋甕の廃絶後まで存続したことを示しており、新しい埋甕と中間期の埋甕が一時共存したといえるのである。又、B二五号は、貼り床の項で新旧の共存を指摘されたが、二つの埋甕に伴う石

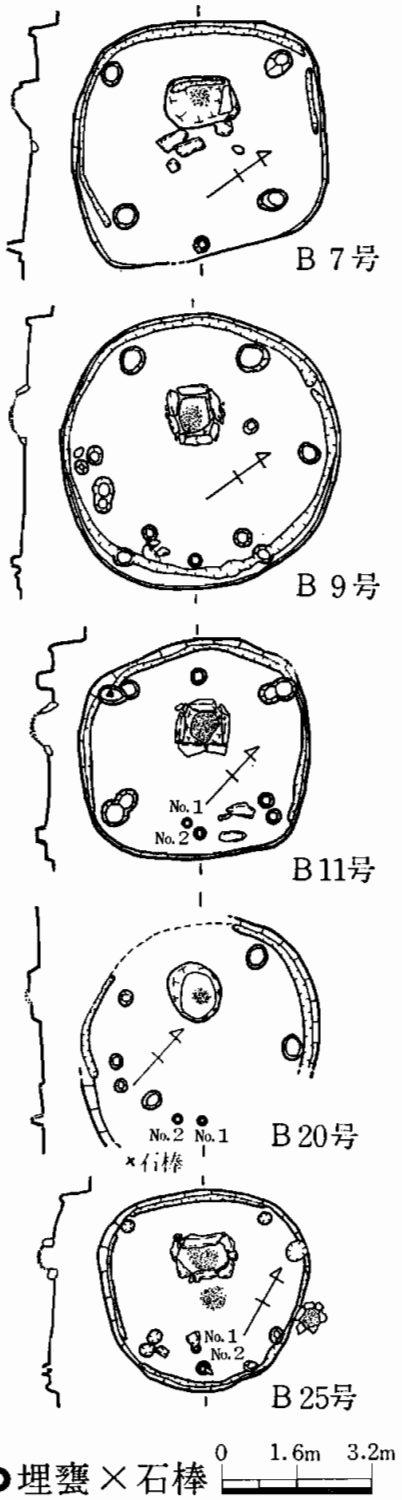



図3　増野新切遺跡住居址実測図（注15文献より）

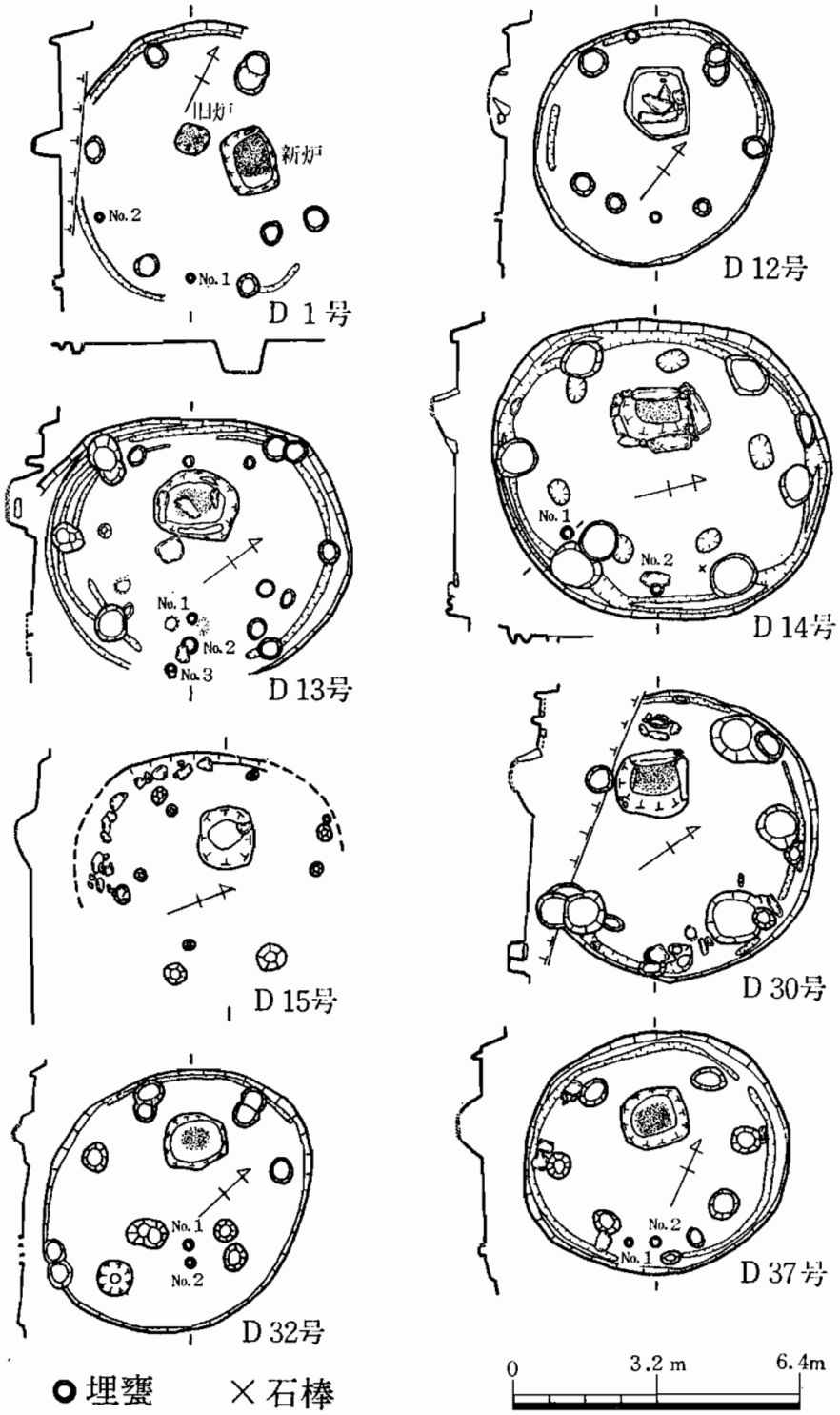



図4　増野新切遺跡住居址実測図(注15文献より。D 14号南側円柱状石塊は省く)

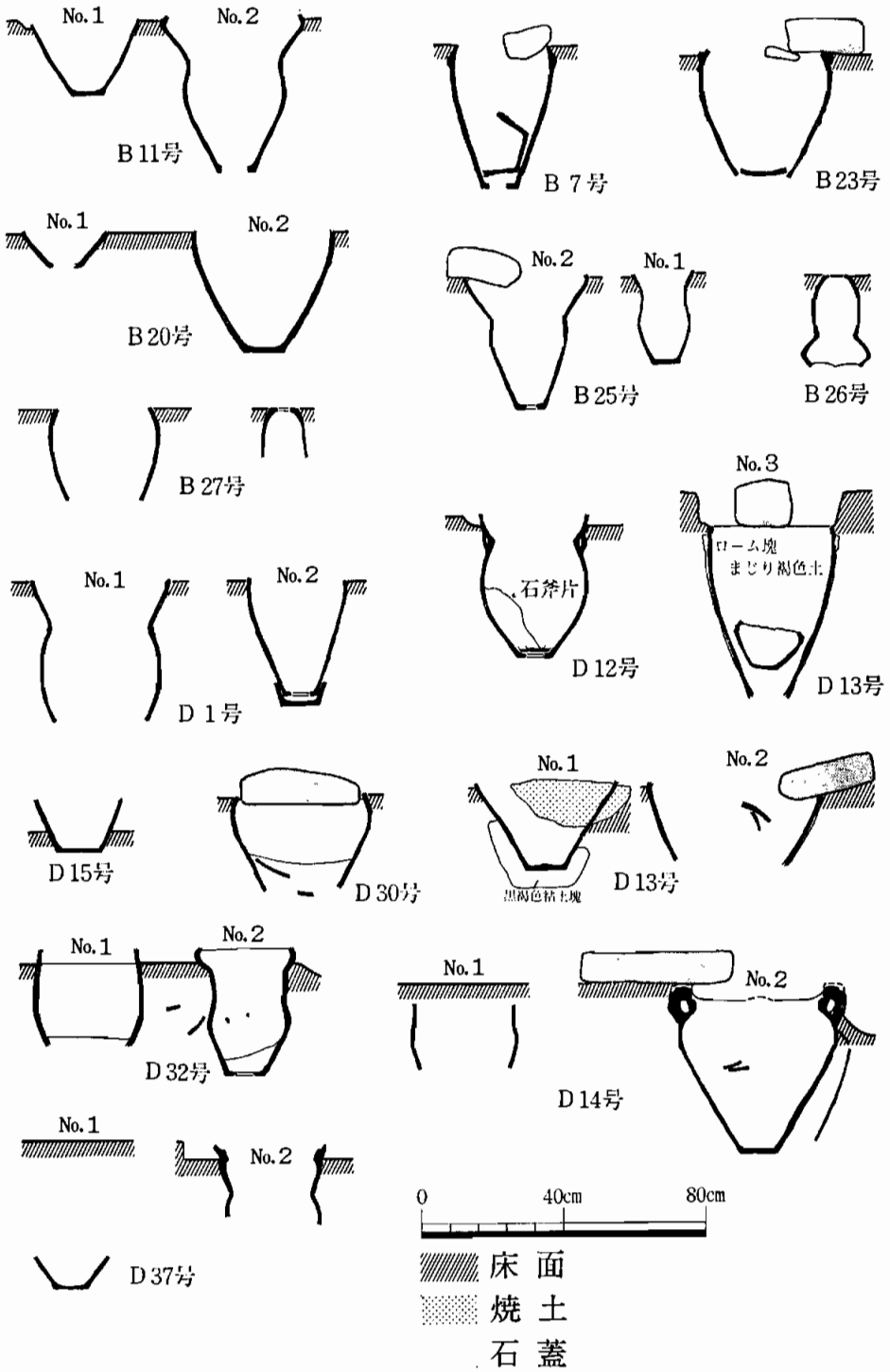



図5　増野新切遺跡埋甕状態図（注15文献より）

の構成においても、D一三号に類似し、その推定を裏付けている。なお、これらの石蓋は、埋甕に添えられているといった表現が適切で、上を覆っているわけではない。遅くとも、住居廃絶時に機能の廃絶がもたらされたといえよう。

以上、二例ではあるが、二個の埋甕が共存し得ること、その期間は長くて一住居存続期間であることが分かった。又、埋甕構築の契機を想定すると、新、改築の可能性が大である。但し、これは埋甕の時間を住居のタイムテーブルで観察するという条件に原因したのかもしれない。さらに埋甕廃絶の契機は、D一三号の新しい埋甕の場合、住居の廃絶ではないといえる。

(2)　一時期の床面に複数の埋甕が構築される。B二〇号、D三七号がそれである。この場合埋甕は並列する。共に一方の埋設土器は底部周辺のみで、皿状を呈し、他の埋甕と異なる。埋甕構築の共通性だけでなく、土器の形態も類似するのである。一時期に複数の埋甕が共存すると考えられるが、D三七号をみると、皿状の埋設土器は、当初普通の形を呈していたが、破壊され床面下に埋め込まれた、と報告されている。三七号に限れば、二つの並列する埋甕は、厳密には共存しないといえる。又、並列という配列の形式を考える時、改築前に新たな埋甕構築が必要とされた場合、この様な配列形をとったものかとも推察される。

(3)　二時期の床面のいずれかに一個の埋甕が構築される。B九、一〇、二三号、D一二、三〇号がそれである。二時期の床面とは、この場合柱の建直しを表現したもので、床面積の異動は殆んど無い。同じく改築をしても、(1)の例は複数の埋甕を持つ。この差異は、改築の内容によるのかもしれない。(1)の場合は、(3)と違って床面積の拡大があるからである。又、新旧いずれの床面に埋甕が構築されたのであろうか。D三〇号の埋甕を覆って石蓋があること、B二三号には石蓋が添っていたこと、以上より、少なくとも新床面には埋甕が機能していたといえよう。よって、埋甕を持たない期間を想定すると、(1)との関連よりほぼ一住居存続期間ということになる。

以上、本遺跡の埋甕の時間特性について、改築をタイムスケールとする住居の時刻表によって検討してみた。結果、埋甕構築の契機は、改築全般には必らずしも一致しないが、床面積の拡大は、埋甕にとって十分条件となる。一方、埋甕の機能の廃絶は、住居の廃絶に伴うのは当然であるが、多くは改築時にももたらされる。但し、その原因を想定する時、必らずしも住居の改築、廃絶であるとはいえない。なお、埋甕の廃絶は、埋甕自体に即していえば、空白か、共存か、この一定期間を考慮した上で、新しい埋甕の構築によって引き継がれた、といえよう。

(iv)　埋設土器の形態　本遺跡の埋甕に使用された土器の形態をみると、口縁を欠くもの、胴上半を欠くもの、口縁、胴下半を欠くもの、胴下半を欠くもの、底部を欠くもの、底部を穿孔するもの等さまざまである。しかし、最初底部を欠いて、埋設の段階で他の底部を底にあてがったり（D一号）、内部に他の土器底部や、破片を入れたり（B七、二三号、D一二、一三号）、ローム土を底部の穿孔に充塡したりするもの（D三二号）がある。故に、底部の有無が形態上の要になっていると仮定される。又、本遺跡の改築は、旧床面を掘り下げて行なわれるところから、上半部の形態は不確実である。以上より、底部の形態で埋甕埋設土器を整理すると、(α)　底部を欠損していないもの、(β)　底部を欠損するが、他の土器片、土によって充塡するもの、(γ)　底部を欠損するもの、の三つに分類できる。その数量比は、α—一一例三二%、β—七例二一%、γ—一六例四七%、となっている。この

三つの形態は互いにどの様な関係があるのか、その差異の由来するところは何であろうか。次に検討してみよう。

まず、時期差が想定できる。そこで改築における埋甕の新旧関係から、形態差と時期差について検討すると、α→γ（B一一、二五号）、γ→β（D一、三二号）、γ→α（D一四号）、α→γ→β（D一三号）の変遷と、α、γの併存（B二〇号、D三七号?）が観察される。これを整理すると、αとγは可逆的であり、さらに併存関係にあったことと、同一の形態のものが連続しないということが明らかである。

以上より、埋甕形態の変遷は、α、γ間において、底部の有無の可逆的変遷を辿るが、βをαの変異形と捉えると、全て上述した変遷は、底部有無の繰り返し—サイクル的変遷になっていることがわかる。すなわち、α、γ間、β、γ間の形態差異は、単なる時期差に対応するものではないといえるのである。もっとも、α、β間にあっては、有—有間の一つの変異と仮定したが、βにαの新しい時代性を認めることができよう。βをαの変異形であるとの仮定の当否は、本遺跡埋甕の変遷を一つの統一体として捉えるのに役立ったことより肯定されよう。しかし、この様な変遷が意味するところは何であろうか。次項において検討しよう。

(v)　埋甕集団及びその構成　本遺跡の埋甕埋設土器の形態は、上述してきたところより三種類ある。α、β、γである。又、βはαの変異形でαダッシュと呼べるものであった。各々は特定の時間、空間を持つ。一方、一(ii)において、一つの目的集団は特定の形態をもつ遺構、遺物として捉えられるとした。よって、本遺跡一住居内埋甕集団は、α集団、β集団、γ集団の三種になる。しかし、β集団は、埋甕αと埋甕βとの関係から、α集団の変化したものといえ、したがって、埋甕集団には、大別してα—β集団とγ集団の二種があったことになる。さらに、埋甕が継起的であり、時に併存するという時間特性や、土器形態の変遷がサイクル的であることから、二種の集団は、系列を異にする二つの集団であり、交互に繰り返し、時に併存したといえる。しかし、一住居に二系列の集団が、継起的に交代、時に併存するとは、どういうことであろうか。これは集団構成の問題である。

ここで思い出して欲しいのは、一(ii)で述べた内容である。それは、埋甕集団の母集団には一住居構成員が想定されたが、埋甕集団の構成は、この一住居構成員からの人員の選択内容に対応する、ということであった。すなわち、問題は、どの様な選択をすれば、上述した埋甕集団を作れるか、ということになる。この集団は繰り返し明らかな様に、時間的に特色をもつ。したがって、時間の変化について検討してみよう。

まず、住居構成員と時間の変化との関係をみると、住居構成員に三通りのメンバーの変化が想定できる。一つは人間の生、死によるものであり、次に婚出、或いは分家、最後に婚入、である。一番目は住居構成員全員におこるものであり、住居構成員を二系列に分けたりはしない。二番目は、その現象が減算的であり、埋甕構築にみられる加算的、或いは少なくとも現状維持的特徴とは相容れない。しかし、三番目の場合、婚入してくるメンバーが二系列の異なった集団に属し、各々が交互に婚入して来るとしたらどうであろうか。そして、住居構成員から、「埋甕活動」に対しその婚入者が選ばれたらどうであろうか。上述してきた埋甕集団の性格を満足させるであろうか。答は可である。すなわち、埋甕集団は、婚入者だといえる。もっとも、実際には、この婚入者が中核となって埋甕集団が組織されたといえよう。しかし、この婚人者は男性か女性か、これは大きな問題であるが、以上の分析からでは不明である。しかし集団構成復原の為の残された分析対象と

して、埋甕構築空間と屋内空間の関係がある。次に、埋甕構築空間の屋内空間における位置を分析することによって、埋甕の属「性」について検討してみよう。

ところで、埋甕は祭祀遺構であるといわれる。それは、埋設土器の多くが打ち欠かれて日常の用を足さなくなっていること、良く似た形態をとるものに貯蔵穴があるが、入口部に位置することから否定されること、この様な事象を根拠にしている。縄文時代中期後半の屋内祭祀遺物、遺構には他に、石柱、石柱石壇、石棒、土偶があり、埋甕も含めて屋内祭祀空間の構成要素となっている。よって埋甕の屋内空間における位置は、祭祀空間における位置によって把握されるべきである。以上から、まず各祭祀遺物、遺構の屋内における位置を観察し、次いで抽出された祭祀空間における埋甕の位置を検討してみよう。

(vi) (イ) 他の屋内祭祀遺物、遺構の空間

石棒　石棒の出土状況をみると、B一三号―奥壁上直立（破片）、D二五号―奥室左横転（破片）、B二〇号―前室左壁直立（破片）、D一四号―前室入口部右直立（破片）、D二二号―炉上面集石中（破片九点）、D二七号―炉（炉石に）、B二三号―地点不明（完形）、D一号―地点不明（破片）、となる。地点が明確なものを整理すると、奥室部、炉辺、前室部となる。但し、炉辺に位置するものの内、D二二号は住居廃絶後の活動に伴うものであり、D二七号は石棒の炉石への転用ということで、共に屋内石棒祭祀例から除外すると、結局、奥室部と前室部の二箇所になる。この位置関係は、住居の奥と表の関係になるが、さらに詳しくみると、壁上のものは、表奥共に直立し、床面上のものは、奥が左部横転、表が右部直立と、奥と表の対称的関係を暗示している。以上より、本遺跡屋内石棒祭祀空間は奥と表の二箇所にあり、各々に対応する二種の石棒祭式が存在したといえるのである。

しかし、一住居で二種の石棒祭式を展開したところはない。或いは、一つの祭祀の祭式における時間差を示しているとも考えられる。というのは、出土地点不明のB二三号例が完形である他は、全て破片であり、特にD二二号例に至っては、同一個体の破片が、周辺の住居だけでなく、かなり隔たった住居から検出され、内一つは凹石に転用されている事実が報告されているからである。D二二号では住居廃絶時、或いは廃絶後に炉上に集石が行なわれたが、その中に九片の細片と他した石棒が認められたのである。完形の石棒が破壊され、細片と他す過程には数次の石棒祭祀のカテゴリーが想定され、祭祀空間も各々に対応するものが用意されたのではないかと考えられるのである。

もっとも、これは石棒が可動的である点に基づいているわけであるが、それ故逆に、出土地点が往時の祭祀空間を示しているかは疑問でもある。横転していたD二五号例はその資料になり得る。ただ、D二五号は火災に遇って突然に廃絶された住居であり、祭式の位置を示している可能性が大である。

ところが、この住居の廃絶と祭祀遺物、遺構の関係をもっと積極的に捉えると、次の様な考え方もできる。すなわち、祭祀遺物、遺構の或るものは、住居廃絶時の祭式、つまり屋内祭式の最終段階を示しているのである、と。上述してきた石棒についていうと、表に位置する石棒祭式にこの段階を対応させることができる。何故なら、表における祭式の展開は、出入口（通路）機能の停止―屋内空間構成の崩壊―永続化―住居の廃絶、が想定できるからである。[11] 本遺跡屋内石棒祭祀の空間は、表と奥にあり、表の方は住居廃絶時の祭式に伴う可能性があるといえよう。

以上の石棒祭祀空間の分析より、屋内祭祀空間は表と奥に二分され

る。この位置関係は、石棒祭祀においては祭式における時間の関係とも考えられる。しかし、表に位置する埋甕と奥に位置する石棒を、一つの祭式の時間差による形態とはいえない（D一四、B二〇号では、石棒、埋甕が表に共存する）。石棒に表徴される奥と埋甕に表徴される表とは、どの様な関係をもつのであろうか。他の祭祀遺物・遺構の位置もこの点に注目して検討しよう。

(ロ) 石柱　石柱は検出されていない。

(ハ) 石柱石壇　明確に石柱石壇と呼べるものはない。しかし、それに対応するものとして、D八、三〇号の炉と奥壁の間に、ピットを円形に或いは方形に巡る石囲いがある。このピットに石柱を想定するのである。形態的にも位置的にも、石柱石壇に対応するものである。[二二] ところが、この遺構は住居床面にではなく、若干浮いた面上に構築されているのである。それでは、住居と無関係に、ただ偶然に住居の炉と奥壁の間に二度にわたって、しかも別地点で築かれたといえるであろうか。住居廃絶に伴う活動を想定するならば、屋内空間を意識して構築されたといえよう。以上より、石柱石壇類似遺構に伴う祭祀空間を住居奥室部に設定できるのである。

(二) 土偶　本遺跡で検出された土偶は、その詳細な出土地点が不明の為、屋内祭祀空間については不明といわざるを得ない。

以上、本遺跡祭祀遺物、遺構の空間について観察し、屋内空間におけるその位置を分析した。要約すると、石棒は表と奥、石柱石壇類似遺構は奥、埋甕は表、となる。すなわち、祭式の展開において屋内空間は表と奥に二分され、それに対応して祭祀は石棒、石柱石壇類似遺構祭祀と、埋甕、石棒祭祀に分けられる。したがって、持ち越されていた問題、埋甕の属「性」は、表と奥の関係と、石棒或いは石柱石壇それ自身の属「性」が明らかになれば復原できよう。しかし本遺跡の資料からは決定できなかった。三章で再考する。

増野新切遺跡における、屋内埋甕の諸要素を分析し、それとの関連において祭祀諸遺物、遺構の屋内空間における位置を検討した。結果、不十分ながら一つの埋甕集団像を呈示した。しかし、この分析結果は、隣接遺跡を含んだ天竜川水系の諸遺跡で検証すべき性格のものである。よって、次に上記地域の主要遺跡を挙げ、増野新切遺跡との比較において観察することにする。なお、隣接諸遺跡は重要であるが、不明な点も多く、必要な場合は注にて紹介することにした。その他の遺跡も同様である。

(b) **尾越遺跡**（長野県上伊那郡飯島町）[二三]（図6）

(i) 遺跡の概観　本遺跡では、中期後半の住居址二四基、後期前半の住居址四基、配石遺構、土拡が検出されている。しかし、これは集落遺跡の中央部の調査によるものであり、全容ではない。

埋甕は中期後半の一〇基から検出されている。各住居による分有関係をみると、曽利Ⅱ式期で二―一〇（一〇基の内二基が持つ）、Ⅲ式期で五―一〇、Ⅲ新式期で〇―四、となっている。曽利Ⅲ式期ではほぼ半数が持つ。埋甕を持つ住居の位置をみると、特定の群に集中する様であるが、住居群の全容が不明の為結論できない。次に、埋甕構築空間を観察する。

(ii) 構築空間　伏甕、住居空間が不明確なものを除くと、全て入口部にある。

(iii) 埋設土器の形態　本遺跡でも増野新切遺跡同様、(α) 底部を欠損していないもの（二例）、(β) 底部を欠損するが、他の土器片で充塡するもの（三例）、(γ) 底部を欠損するもの（五例）、の別があり、[二四] 底部有、無の視点からその数量比を求めると、有対無が一対一となる。

又、各埋甕の土器形式、住居における新旧関係から、この土器形態

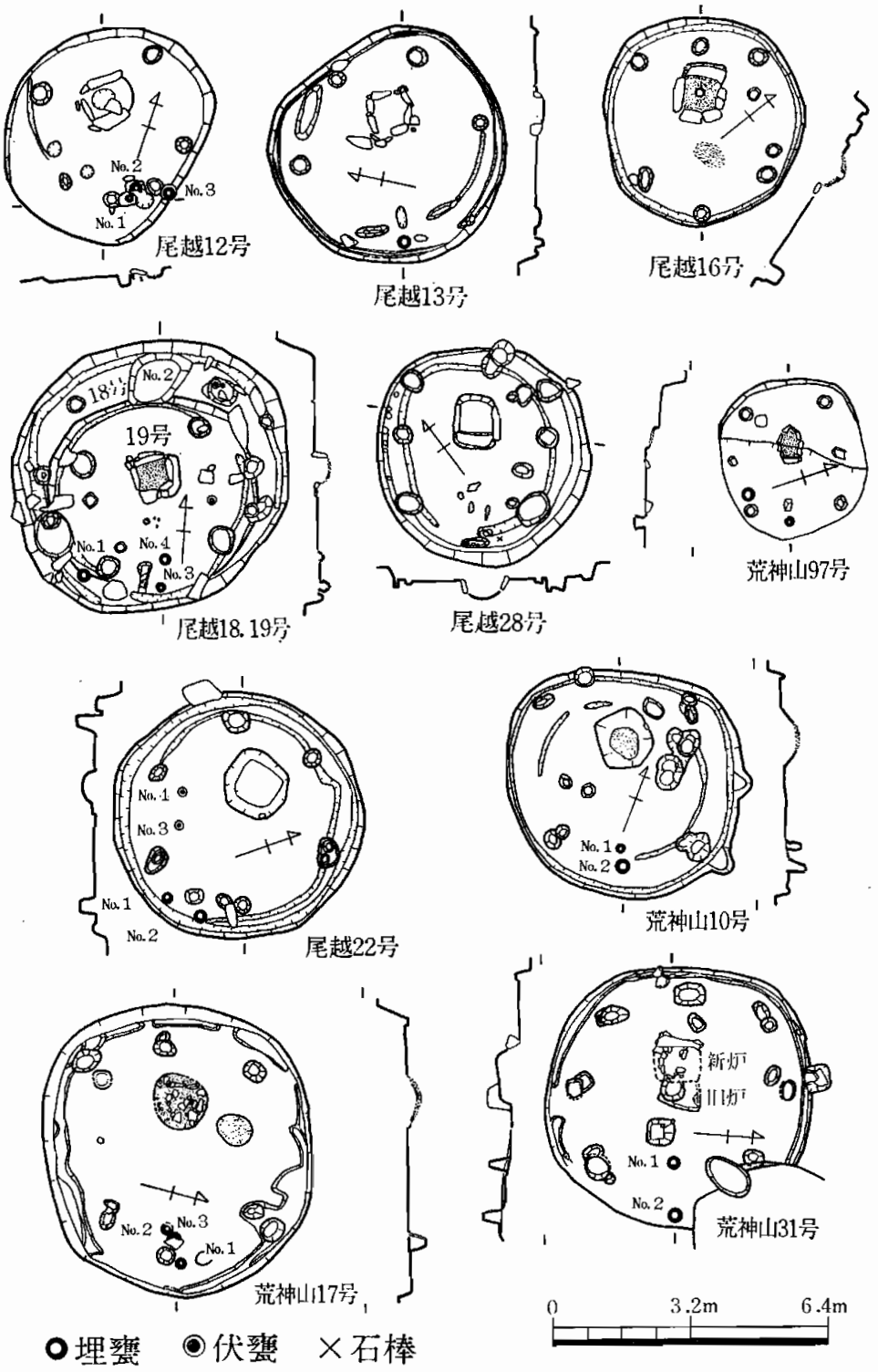



図6　尾越遺跡、荒神山遺跡住居址実測図(注22. 25文献より)

の差異を検討すると、曽利Ⅱ式期にγ（二例）、Ⅲ式期にα（二例）、β（三例）、γ（三例）が存在し、Ⅲ式期では、β→γ→α（一二号址）、β→γ（一九号址）の変遷、β—γの併存の可能性も指摘される。増野新切遺跡と同様の展開であるが、増野新切遺跡のγ→βの変遷に対し、本遺跡ではβ→γになっている。この事実は、変遷に示される独特の行動様式自体は、土器形式を担うような地域集団を背景として成立し、その形態の順序については、隣接集落をまとめた程度のより小さい集団によって決定されていた、という埋甕文化システムを推測させるものである。次に埋甕構築の時間特性を観察してみよう。

(iv)　構築時間、基本的には増野新切遺跡と同様であるが、時間特性を良く示す資料がある。一二号址がそれである。一二号址は少なくとも一回の改築が認められ、三個の埋甕が並列する。(iii)より三個の埋甕の構築新旧関係は、埋甕番号、二号、一号、三号の順となる。ところが、一号には石蓋が設けられ、三号には貼り床が施されている。増野新切遺跡例からすると、三号には一号より前に機能の廃絶が訪れたことになる。したがって、一号と三号は一時期併存し、最後に構築された三号が、住居の廃絶以前に機能の廃絶を迎えたといえよう。すなわち、埋甕には一定の存続期間があり、二個の埋甕が併存することもあり得ること、さらにその廃絶が住居の廃絶以外の原因でもたらされることもあり得ること、この様な埋甕の性格を一二号址は示しているのである。増野新切遺跡D一三号に類似した資料である。

又、一二号址には複数の埋甕が並列するが、複数埋甕の配列には直列もある。この差異は何に由来するのか。この点について検討してみよう。なお、増野新切遺跡では、改築による床面積の拡大以前に新たな埋甕の構築が行なわれた時、並列になるのではないかとした。しかし、本遺跡では拡大がみられるのに並列する。一二、二二号址がそれである。一方、同じく拡大するが直列するのに一九号址がある。すなわち、この三例を比較することによって、並列と直列の差異を分析してみよう。

三者は共に拡大されているが、その部分は、入口からみて、一二号址では左側室部、一九号址は全体、二二号址は入口部以外の空間となっている。一九号址だけが入口部の拡大を行なっている。一九号址だけが直列である。すなわち、配列の差異は、入口部拡大の有無によっているといえよう。(二四)

この結果から、増野新切遺跡例を分析すると、改築前の住居入口部には変動がないから、新たな埋甕は並列する、ということになる。増野新切遺跡での分析結果に合致する。次に、本遺跡屋内祭祀遺物、遺構の出土空間を観察する。

(v)　屋内祭祀遺物、遺構の空間、本遺跡では石棒と土偶が検出されている。

(イ)　石棒　石棒は、二八号址入口部右側に直立して出土している。本住居は火災に遇っているが、炉石の抜取りがみられるところから、住居廃絶後に焼けたものかもしれない。そうすると、石棒の出土状況は、少なくとも廃絶時の状態を示しているといえよう。

(ロ)　土偶　一三号址の炉の奥辺に接してピットがあり、その中に土偶破片が一点入っていた。又、一六号址の炉の東に隣接した焼土中から土器に挟まれて出土している。なお、この土偶破片と同一個体のものが、住居外一〇米の地点で発見されている。この様な土偶出土空間の多様性、出土時の形態（破片）から、土偶祭式における場所の移動、時間の移動（期間）が想定される。したがって、屋内における土偶祭祀空間の限定は困難である。ただ炉辺からの出土、焼土からの出土は、空間との結びつきより、火そのものとの結びつきを示すものであると

いえよう。[三五]

(C) **荒神山遺跡**（長野県諏訪市）[三六]（図六、七）

(i) 遺跡の概観　本遺跡では、八五基にのぼる中期の住居址が検出されているが、調査区域は集落南部の開口部にあたり、その全容は不明である。埋甕は一八基の住居址から検出されており、時期別にみると、井戸尻Ⅲ式期一―三（三基の内一基が持つ）、曽利Ⅱ式期一二―二九、Ⅲ式期四―八、Ⅳ式期一―一、となっている。先にみた尾越遺跡にその分有率は近いが、住居址間に重複が多く、さらに編年区分が可能なので、断言できない。又、埋甕を持つ住居の分布をみると、扁在するということはない。次に埋甕構築空間を観察する。

(ii) 構築空間　九七号址以外、全て入口部に位置する。九七号址では入口部に胴下半を欠いた土器が逆位に埋設されており、左側室前部に口縁、底部を欠損した土器が正位に埋設されている。上述した二遺跡や、天竜川水系諸遺跡において、明確に入口部と推定される場所に逆位の土器を埋設した例は珍しい。ただ二つの埋設土器の位置を逆にした例が原垣外遺跡[三七]にある。何故、本遺跡にこの様な例が存在するのであろうか。ところが、八ヶ岳西南麓に目を転ずれば、この様な例は珍しくない。[三八]本遺跡は天竜川の源、諏訪湖の東南岸にあり、東に八ヶ岳西南麓が続く。すなわち、この様な地理的環境から、上記の埋設土器の形態が選択されたといえるのである。又、九七号址は、曽利Ⅱ式期でも古い段階に位置づけられている。埋甕の普及当初に位置することも、そのあたりの事情を物語っているといえよう。

(iii) 埋設土器の形態　本遺跡でも増野新切遺跡同様、(α) 底部を欠損していないもの（八例）、(β) 底部を欠損するが、石で充填するもの（一例）、(γ) 底部を欠損するもの（一二例）、の別があり、底部有、無の視点からその数量比を求めると、有対無が一対一・五となる。

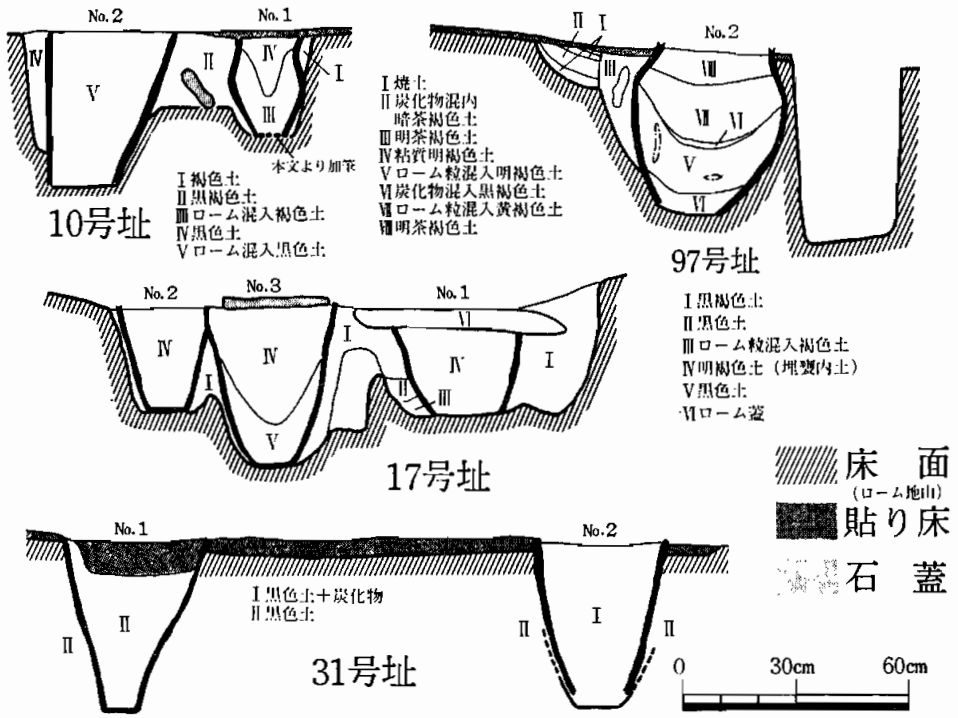



図7　荒神山遺跡埋甕状態図（注25文献より。）

又、各埋甕の土器形式、住居における新旧関係から、この土器形態の差異を検討すると、曽利Ⅱ式期にα（五例）、γ（一〇例）、Ⅲ式期にα（二例）、β（一例）、γ（二例）が存在し、曽利Ⅱ式期の一〇号址、三一号址でα→γ、Ⅲ式期一七号址でα（二号）→γ（一号）→α（三号）の変遷を指摘できる。増野新切遺跡同様、サイクル的変遷を展開していたことがわかるのである。次に、埋甕の時間特性について検討するが、基本的に上述した二遺跡と異なるところが無い為、良好な資料を呈示するに止める。

(iv) 構築時間　一七号址は一度の改築と直列した三個の埋甕を持つ。埋甕構築の新旧関係は、上述したところより一番内に位置するもの（二号）、外側に位置するもの（一号）、真中のもの（三号）、の順になる。一般的に内から外へ、順次構築されていくのに対し、飛石的に外へ出、一転して内に返る点が珍しい。さらに構築時期を想定すると、二号は第一次床面に、一、三号は、その順序で改築後の第二次床面に構築されたものと推定される。すなわち、二号、一号の構築は、新、改築に伴う可能性があり、少なくとも三号の構築は、改築と無関係であったといえよう。以上は、構築の時期を検討したものであったが、次に廃絶の時期を検討してみよう。

その資料として、(1) 各埋甕は、二号（第一次床面）→一号（第二次床面）→三号（第二次床面）の変遷を展開したこと、(2) 一号はローム土蓋で密閉されていること、(3) 二号は三号に破壊されており、特別な設備はないこと、(4) 三号に石蓋が伴うこと（石蓋は添えられているといった表現が適切）、(5) 各埋甕中には全て同一の埋土が認められること、以上が挙げられる。(2)(3)(4)(5)より、各埋甕の機能は全て廃絶されているといえよう。故に、各埋甕の検出状態は機能廃絶状態を示しているといえる。いま各埋甕の廃絶に対応する現象を挙げると、(1)(3)より、二号に対し改築と三号埋甕の構築、三号に対し住居の廃絶がある。しかし一号は不明である。ところが、各埋甕の機能廃絶形態が三者三様であることより、各々に異なった原因が想定できる。すなわち、一号には、住居の改築、廃絶以外の原因を求めなければならないのである。

以上、埋甕の時間特性について検討した。次に、屋内祭祀遺物の出土空間を検討しなければならないが、検出された土偶二点の詳細不明の為、断念する。

増野新切遺跡を中心に、尾越遺跡、荒神山遺跡における埋甕構成諸要素の観察と分析を行なった。結果、天竜川水系諸遺跡に一つの埋甕集団像を想定できる。しかし、最も重要である、集団の中核メンバーの「性」については、未だ決定できない。次章「埋甕集団とその構成の復原」において、その問題を追求したい。

## 三　埋甕集団とその構成の復原

本章では、主に埋甕集団の属「性」について検討する。増野新切遺跡において、埋甕集団の中核メンバーは婚入者であり、その性別は、屋内祭祀空間における奥と表の関係と、石棒、石柱石壇のいずれかの属「性」から抽出できるとした。次に、与助尾根遺跡、洞遺跡の祭祀遺物、遺構のあり方を観察、分析して、この問題に答えたい。

(a) **与助尾根遺跡**（長野県茅野市）[二九]（図八、九）

八ヶ岳西南麓の著名な遺跡の一つに与助尾根遺跡がある。二八基の住居址が検出されているが、大部分は中期末葉に属する。水野正好氏は、炉石の有無に住居群の建替えを想定し、結果、隣接する二基の住居を住居群の最小単位―一小群とし、土偶、石棒、石柱を分有する三小群が、東西に二組並列するところから、この三小群を大群とした。

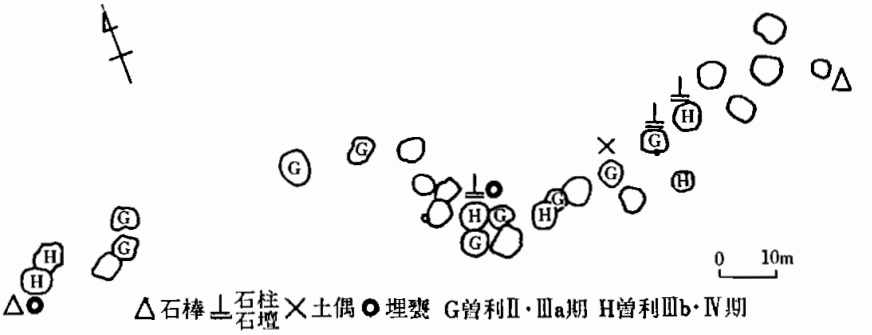



図8　与助尾根遺跡住居址群の分布と祭祀遺物、遺構の分布
（長崎注21文献を参考にする）

つまり、隣接する二基よりなる小群三組が大群となり、それが東西に対峙する群構成を想定したのである。[三〇] これに対し、長崎元廣氏らの批判もあるが、[三一] 曽利式期における住居構築は、土器形式上連続的であり、建替えのあり方もそれを裏付けている。したがって、与助尾根遺跡中期末葉（曽利式期）各時期の集団に連続性と統一性を認め、[三二] それを基礎として、祭祀遺物、遺構の位置関係から、祭式の展開を検討する。

本遺跡住居内より、石柱石壇、石棒、土偶、埋甕が検出されている。いま埋甕の分布をみると、埋甕が検出された住居は全て、他の祭祀遺物、遺構を出土する。四号が石棒、一五号が石柱石壇である。又、埋甕埋設土器の形態をみると、四号では正位完形石蓋付き、一五号では逆位底部欠損石蓋付きである。すなわち、土器形態の差異が他の祭祀遺物、遺構の差異に対応しているのである。このあり方は、埋甕が祭祀領域に一つの位置を占めていたことと、住居群の構成と祭式の構成が緊密な関係にあること、この二点を示している。故に、まず住居群の構成と祭式の展開をみる。

石柱石壇、石棒は、東西にセットとなって在り、並列する。一方、土偶は東、埋甕は西に扁在する。したがって、石柱石壇、石棒各祭式は、東西二つの組によって各々展開されたといえる。それに対し、土偶、埋甕各祭式は、東の組、西の組の区分は明確であるが、その祭式において一つにまとまり、東、西いずれかの出土住居において執行されたといえる。以上から、石柱石壇、石棒、土偶、埋甕は、全体として一つの祭祀領域を形成するが、その祭式の展開において、石柱石壇、石棒と、土偶、埋甕は異なるカテゴリーに属し、各々の祭式集団の構成も異なっていたことが推定されるのである。それでは屋内における祭式の展開は、それとどの様に対応するのであろうか。祭祀遺物、遺構の屋内空間の位置を検討してみよう。

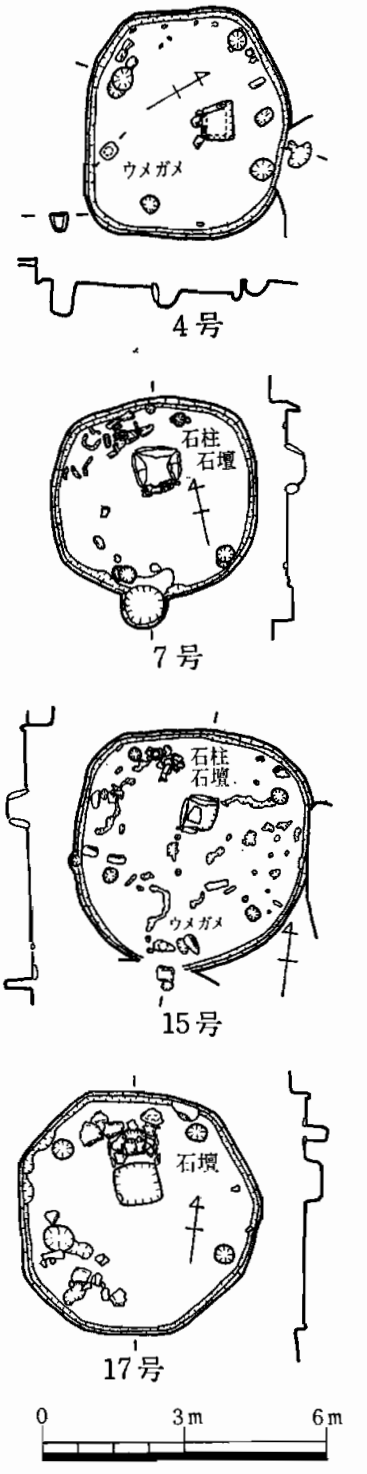



図9　与助屋根遺跡住居址実測図(注28文献より)

石柱石壇は奥室に位置する（七、一五、一七号）。これらは住居床面に据え付けられており、その位置が祭祀空間を表わしている。中でも七、一五号には石柱が残存し、一五号では石蓋が埋甕を覆っている点を考慮すると、各々の機能途中に住居の廃絶が襲ったといえよう。

石棒も奥室に位置する（四、二六号）。

土偶は、八号で検出された。前室左隅の台石上の壺中に土偶首部が入っていたのである。土偶が遺構に伴って出土するのは珍しく、この例は、土偶祭祀空間を知る上で良好な資料といえる。

埋甕はすでに述べた様に、二住居から検出されており、全て入口部に位置する。石蓋が覆っていたところから、機能中に廃絶されたものである。

以上、祭祀遺物、遺構の屋内空間の位置について観察した。要約すると、石柱石壇、石棒は奥室に、土偶、埋甕は入口を含めた前室に各々位置する。屋内空間の位置においても、石柱石壇、石棒と、土偶、埋甕は二つに分かれるのである。このあり方は、上述した住居群の構成にみられる祭式の展開と同一のものである。しかし何故、祭祀領域はこの二つのカテゴリーに分かれるのであろうか。次にこの分類基準について検討してみよう。

一般に石棒は、男性の狩猟活動と関係した祭祀に関連し、土偶は女性原理に根ざした祭祀形式とされている。(三四)よって、石棒と土偶は、男性対女性の対立関係にあるといえる。すなわち、各々の所属より、祭祀領域を二分する分類基準は「性」といえ、石柱石壇、石棒と、埋甕、土偶は男対女の対立を持つのである。各々が属する空間、表と奥の関係は、まさにその対立に合致した空間構成を示している。

以上より、本遺跡で検出された埋甕の属「性」を女とすることができよう。又、この結果を増野新切遺跡埋甕集団に適用すると、中核メンバー、すなわち婚入者は「女性」ということになる。しかし、与助尾根遺跡の結果を増野新切遺跡に単純に適用できるのであろうか。なるほど、増野新切遺跡でも石柱石壇類似遺構と埋甕が、表と奥の対立を示しており、与助尾根遺跡に対応する。ところが、増野新切遺跡では石棒が前室＝表より出土する場合もあった。(注34) これは属「性」から矛盾する。これを解決しなければ、与助尾根遺跡の結果を適用できないのである。もっとも、その解決案として増野新切遺跡にて分析した様に、前室部石棒祭式を住居廃絶時祭式に対応させる考え方がある。廃絶時＝屋内空間構成の崩壊に、その根拠を求めるのである。果してこの考え方は可能か。次に洞遺跡を挙げて検討する。

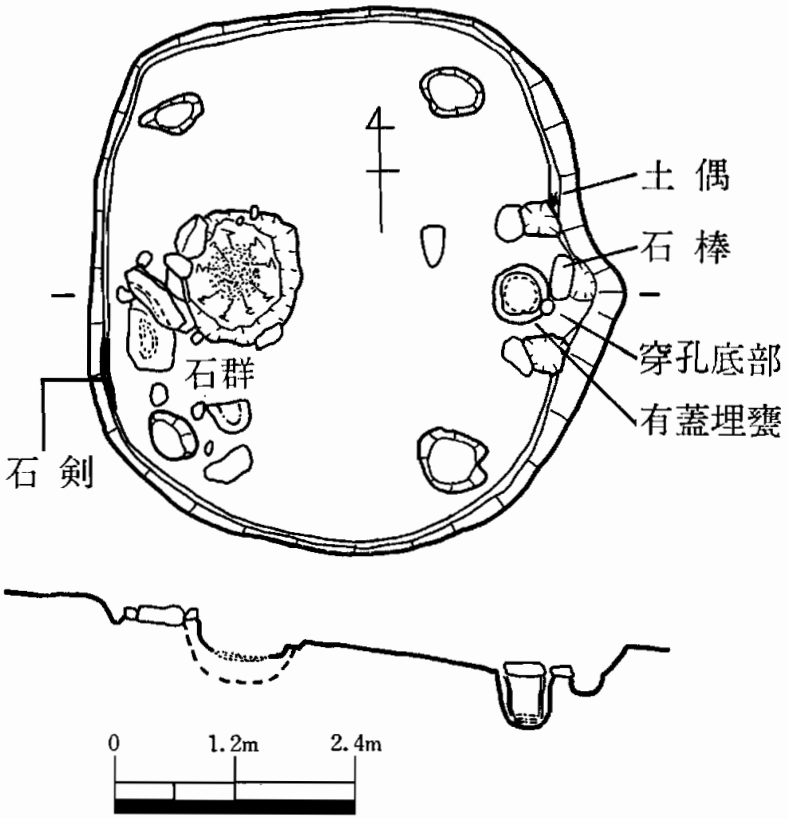



図10　洞2号住居址実測図(注35文献より)

(b) **洞遺跡**（長野県東筑摩郡山形村）(注35)（図一〇）

本遺跡から二一基の縄文時代中期の住居址が検出されているが、時期の判明するものは全て中期後半に属する。上述の問題の検討資料として挙げるJ二号もその内の一つである。

J二号からは、炉址と奥壁の間に石群、これと近接した周溝内から石剣一点と、入口部と推定される小張り出し部内側より、石棒一点、土偶一点、有蓋埋甕一点、穿孔底部片一点が集中して出土している。なお、石棒は完形で、据え付けではなく横転しており、土偶は破片である。この祭祀遺物、遺構の出土状況は、二つの点で注目される。一つは、一箇所に石棒、土偶、埋甕の祭祀遺物、遺構が集中していること、今一つは、入口部に石棒、土偶がみられることである。この意味するところは何であろうか。まず前者から検討してみよう。祭祀遺物、遺構の集中は、祭式の集合を示している。本遺跡において石棒、土偶祭式各々に屋内特定空間が設定されていたとするならば、この祭式の集合は、祭祀空間としての屋内空間の構成が崩壊したことを示している。この状態の永続化、

これは住居の廃絶、結果としての今日の姿である。以上から、住居廃絶を契機とした祭式の集合が想定される。この祭式は住居廃絶時祭式と呼ぶことができるのである。なお、屋内祭祀に対する特定空間の設定は、上述した諸遺跡を始め、中期後半諸遺跡で知られるところである。次に後者について検討してみよう。入口部に埋甕が位置することは、上述してきた様に中期後半諸遺跡に通有のものである。本来的位置関係を保っており、それによって出入口の通路としての機能は損われない。しかし、石棒や土偶がここに位置し、祭式が展開されたとすると、通路の機能停止をもたらす。これは祭祀空間ではなく、日常生活空間そのものの崩壊を意味し、祭祀遺物の入口部への残存から、ここにも又、住居廃絶を契機とした祭式の展開を認めることができるのである。つまり、洞遺跡J二号入口部における祭祀遺物のあり方は、住居廃絶という現象の聖、俗、二つの側面を表わしているといえよう。

以上、入口部祭式の展開は、住居廃絶を契機とし、崩壊した空間構成上に展開したといえよう。屋内空間の奥と表の対立はもはや無く、時を象徴する入口部に祭祀の結集がはかられたのである。故に、入口部石棒祭式は「性」のカテゴリーを基礎に成立したものではないといえるのである。

奥室部石棒祭式と入口部石棒祭式は、一つの祭祀の二つの時間相といえるものであり、奥と表の対立は、時間の対立となる。すなわち、これが、増野新切遺跡前室部石棒祭式と与助尾根遺跡石棒祭式間における属「性」矛盾への解答である。

以上より、増野新切遺跡及び天竜川水系諸遺跡埋甕集団とその構成を復原しよう。

すなわち、埋甕集団の中核メンバーは婚入者であり、それは女性である。彼女達には二つの系列があり、それは彼女達の故郷の集団といえる。彼女達は異なる二つの集団から交互に婚入して来たのである。又、埋甕は彼女らを中心に構築、入口において祭式の展開をみたが、その契機は婚姻の成立、その廃絶は彼女らの死によってもたらされたものと推定される。

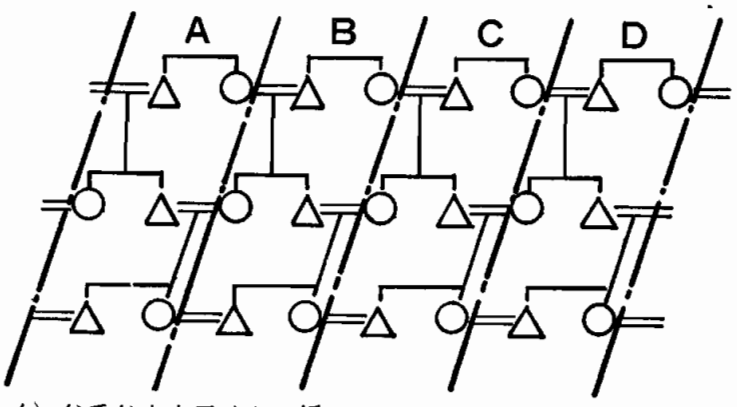
埋甕構築、そして廃絶が持つ時間的にルーズな側面は、人の死や、婚姻という不確定要素を多く含んだ活動によってこそ説明し得るのである。

それでは、この様な婚入者は、如何なる婚姻システムによってもたらされるのであろうか。次章において検討してみよう。

## 四　おわりに—埋甕集団と婚姻システム

以上、屋内埋甕の構築から廃絶の過程を、時間、空間、土器という構成要素の形成、変遷に求め、その過程をつうじて埋甕集団及びその構成を復原した。さらに、その構成から天竜川水系中期諸遺跡に、女性が婚入してくる、つまり夫方居住婚の存在を認めることができた。ところが、この女性達は二つの集団から交互に婚入してくるのである。これはどの様な婚姻システムに対応するのであろうか。民族学における婚姻モデルを検討してみよう。

図一一のイは、レビィ＝ストロースによって作成された一般交換の一つのモデルである。[注五] これは、父系父方交叉イトコ婚を示している。すなわち、父の姉妹の娘が結婚相手として優先され、彼女が男の居住地に婚入してくる形態なのである。この婚姻形態にみられる女性交換の特徴を、レビィ＝ストロースの言を借りて説明しよう。すなわち「……例えば、BがAから妻をもらい、その結婚から生まれた娘を次の世代のAの男の妻として返すのである。外婚的集団を、A、B、C、D、……$n$と並べてみると、どの集団をとっても、仮にCをとれば、




イ）父系父方交叉イトコ婚システム図（レビィ＝ストロース注35より）

| 世代 | 婚入者出自 | 埋甕集団系列 | 床面 |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | B | $\alpha$ | Ⅰ |
| Ⅱ | D | $\gamma$ | Ⅱ |
| Ⅲ | B | $\beta(\alpha')$ | Ⅲ |

ロ）C集団の婚入者出自と埋野新切遺跡埋甕集団の系列

図11　埋甕集団と婚姻システム

ある世代では女をDに与え、Bからもらい、次の世代ではBに与え、Dからもらって、これを無限に続けていくのである。……」つまり、女性交換の往復が世代をわたって遂行されることと、この婚姻システムには三つ以上の外婚集団が必要であるということが特徴である。しかし、今上記説明中の後半に注目すると、Cの集団の男の妻は、ある世代ではBから、次の世代ではDからと、BとDの集団から世代毎に交代して婚入してくる、といっているのである。すなわち、これは増野新切遺跡の婚入者と同一の構成を説明しているのである。この対応関係は、図一一のロの様に表わすことができる。

以上から、増野新切遺跡を始めとする天竜川水系諸遺跡の集団は、父系父方交叉イトコ婚を、その婚姻形式として採用していたといえるのである。

この様に、天竜川水系諸遺跡の埋甕集団とその構成、及び婚姻形式を結論づけられるが、他地域の遺跡はどうであろうか。三章で紹介した与助尾根遺跡では、埋甕の導入が集落末期であり、埋甕集団の系列は不明といわざるを得ない。ただ、埋甕と土偶が祭祀領域において同一のカテゴリーにあること、住居群の構成と関連した分布より、対称的であること、以上より、与助尾根遺跡の女性達が、埋甕集団と土偶集団という対称的な二つの集団から構成されていた可能性もある。しかし、これは増野新切遺跡集団の系列とは異なるものである。系列と対応するものは、埋甕、土偶各集団の内部で探さなければならないものである。又、八ヶ岳南麓に位置する曽利遺跡では、[三八]埋甕埋設土器の底部形態が、報告されているものの内一例を除いて全て同一である。土器形態に増野新切遺跡と同様の意味を与えるならば、埋甕集団は一系列であるといえる。神奈川県川崎市の潮見台遺跡も同様である。東京都町田市の鶴川J地点遺跡では、[三九]埋甕祭式と土偶祭式がオーバーラ

ップし、系列の抽出を困難としている。各地域各遺跡に多数の埋甕をみるが、そこから埋甕集団やその構成を復原できる見透しを持つものは少ない。又、分析対象の性格上、地域的にまとまった資料を必要とする。この様に、先には困難な状況が待ち受けている。資料の増加、分析視点の開発をはからねばならない。

天竜川水系諸遺跡においては、さらなる資料の増加と、土器形式の細分、集落の具体的変遷を把握することによって、集落群を抽出し、そこにおける埋甕の動態から、婚姻集団の実体を追求しなければならないのである。

## 注

1、埋甕は構築され、使われ、廃される。埋甕という形で残された活動は、この三段階から構成されており、各々に特定の集団を想定しなければならない。本稿では、それを埋甕集団と呼ぶ。以後、埋甕の残存形態から埋甕集団及びその構成を復原するのであるが、埋甕が何に、どの様に使用されたのか、今日まで決定的な証拠はない。本稿において主要な分析対象を埋甕の構築方法においているので、それより抽出された集団、その構成には、必然的に「埋甕構築集団」という条件を付与しなければならない。又、上記三活動のカテゴリーは、重なる場合もあろうし、それに対応して集団も一致する場合もある。そうでない場合もある。もっとも、その区別は埋甕において現在不明であるが、作業上、三つの活動カテゴリーと対応する個別集団を想定しておいた方が良いと思われる。

2、「埋甕」と呼ばれるものには、屋内に設けられるものと、屋外のものの二通りあるが、構築場所の差異は、遺構属性に対する根本的差異を表わすので、本稿では「屋外埋甕」は分析対象としていない。よって、「従来の研究」においても「屋内埋甕」の研究に限定した。なお、屋外埋甕については、山本暉久氏の研究が詳しい。山本暉久「縄文時代中期末・後期初頭期の屋外埋甕について（上）（下）」『信濃』二九巻第一一・一二号　一九七七年。

3、代表的論考に、渡辺誠「原初の神々」『講座日本の古代信仰』第二巻　一九七九年　学生社　がある。

4、代表的論考に、木下忠「戸口に胎盤を埋める呪術」『考古学ジャーナル』四二　一九七〇年　がある。

5、水野正好　「埋甕祭式の復原」『信濃』三〇巻第四号　一九七八年。

6、一般に出入口部と報告されている部分は、実際には推定されたものである。したがって「出入口推定部」と記すのが正しいが、煩雑であるので以後「入口部」と記すことにする。

7、久保常晴　伊東秀吉　関俊彦　『潮見台遺跡』　一九七一年　中央公論美術出版。

8、「埋甕」に対して、民族学成果の導入が行なわれているが、これは、民族誌事例と発掘所見の比較という形で展開されている。この場合、時間と空間を隔てた「生」の資料をそのままで使用できるのかどうか、という問題がある。民族学援用の問題に関しては、大林太良「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』二―二　一九七一年　の中で触れられている。民俗誌例を比較の対象にする場合、民俗誌例自体の歴史を検証する必要がある。しかし、これはおそらく文献史学と考古学によって可能であろう。

9、室内空間の分割は、主に柱穴、炉の位置、中軸線の位置から便宜上設定した。図二参照。

10、諏訪山遺跡一二号住居址にみられる（埼玉県岩槻市）。『埼玉県遺跡調査報告』第八集　一九七一年。

11、資材の変形、及び資材、時間、空間、集団を一定の方法で組織すること。

12、神村透氏によって資料の集成、整理が行なわれ、成果があげられている。神村透「埋甕と伏甕―そのちがい―」『長野県考古学会誌』一九・二〇合併号　一九七四年。

13、連帯的活動の場合は、活動の方法を共有すること自体が一つの目的となり、その時空の拡がりが問題となる。

14、注1参照。

15、遠那藤麻呂・金井正彦　「4増野新切遺跡」『中央道埋文報告書』下伊那郡高森町地内その2　昭和四七年度　一九七三年。

16、住居址の編年、戸数は注15の文献による。改築による重複住居は、一基としている。

17、八木光則「縄文中期集落の素描(1)―信濃伊那谷における集落共同体をめぐって」『長野県考古学会誌』二五　一九七六年　による。

18、神村透氏は、屋内埋設土器の内、入口部にあるものを「埋甕」、それ以外の位置で正位のものを「特殊埋甕」、逆位底部穿孔（穿孔のないものも少数例あるのを含む）のものを「伏甕」としている。神村注12二一頁。私もこの用語に従う。なお、本稿では分析対象を「埋甕」に限る。

19、土器形態α、β、γを八木光則氏の編年（八木注17）に従って区分すると、Ⅱ期―α五例、β一例、γ六例、Ⅲ期―α五例、β六例、γ一〇例、Ⅳ期―α一例　となる。βは明らかに新しい傾向である。なお、βをαの変異形とし、土器形態の差異を底部欠損の有無として捉えると、各期における底部有無の比率は、一対一となる。これは埋甕集団を考える上で重要なポイントになる。

20、埋甕も入口部に位置している為に、住居廃絶時の祭祀と推定されるかもしれない。しかし分析された時間特性からその推定は不可能である。

21、石柱石壇は一般的に奥室に位置する。縄文時代中期の祭祀遺物の位置、祭式の展開に関しては、長崎元廣氏の論考に詳しい。長崎元廣「八ヶ岳西南麓の縄文中期集落における共同祭式のあり方とその意義（上）（下）」『信濃』二五巻四、五号　一九七三年。

22、神村透・他「4尾越遺跡」『中央道埋文報告書』飯島町・高森町・阿智村その一　昭和四六年度　一九七二年。

23、但し、形態不明一例を除外している。増野新切遺跡では、一(有)対〇・九(無)であった。ちなみに、天竜川水系諸遺跡でこの様な埋設土器の形態差異を展開する遺跡を挙げると、(a)庚申原Ⅱ遺跡（下伊那郡松川町）―一(有)対一・七(無)（総数八例）、(b)中原Ⅰ遺跡（下伊那郡松川町）―三例中全て有、となっている。又、(c)北方Ⅰ遺跡（駒ケ根市）では、埋設土器の大小が上記諸遺跡の底部の有無に対応する。大小は欠損範囲によっているが、その比率は、一(小)対一・三(大)（総数九例）である。ただ、この遺跡では底部を欠損しないもの二例、他の土器底部で充填するもの一例と、大小以外のバラエティーもあり、状況を複雑にしている。隣接する(d)富士山遺跡にも大小の差異が観察される。しかし、問題の増野新切遺跡に隣接する(e)増野川子石遺跡では四基の住居址が検出されているが、埋甕は出土しなかった。この様な埋設土器の形態差異、変遷は、上記した諸遺跡以外にも知られる。しかし、形態差異の比率において、ある程度の変異が認められる。全体数の少ないものや、単一の時期に構築された住居群での比率は、保留すべきであろう。

(a)矢口忠良「庚申原Ⅱ遺跡」、(b)岡田正彦「中原Ⅰ遺跡」『中央道埋文報告書』下伊那郡松川町地内　昭和四七年度　一九七三年。(c)(d)『大城林・北方Ⅰ・Ⅱ・湯原・射殿場・南原・横前新田・塩木・北原富士山　緊急発掘調査報告』　一九七四年　駒ケ根市教育委員会　南信土地改良事務所。

(e)酒井幸則「5増野川子石遺跡」『中央道埋文報告書』下伊那郡高森町地内その2　昭和四七年度、一九七三年。

24、北方I遺跡では二個の埋甕が並列するケースが多く、住居は改築されていない。又、一例であるが、並列と直列が組み合わさったものがある。しかし、報告を分析すると、新旧二つの住居のものが混在した様である。

25、桐原健「土偶祭祀私見」『信濃』三〇巻四号　に土偶出土状態の集成がされている。

26、伴信夫・平出一治・木下平八部　「9荒神山遺跡」『中央道埋文報告』諏訪市内その一、その二　昭和四八年度、一九七四年。岡田正彦・他「6荒神山遺跡」『中央道埋文報告書』諏訪市その三　昭和四九年度一九七五年。

27、気賀沢進一・小原晃一　『原垣外遺跡』　一九七八年　南信土地改良事務所　駒ケ根市教育委員会。

28、神村注12の中で南信地方の埋甕の地域性が論じられている。

29、宮坂英式　「与助尾根遺跡の発掘調査」『尖石』　一九五七年　茅野町教育委員会。

30、水野正好　「縄文時代集落復原への基礎的操作」『古代文化』第二一巻三・四号　一九六九年。

31、長崎注21。

32、この前提は、祭祀遺物、遺構の分布によって証明される。

33、大林注8で縄文時代祭祀遺物、遺構への民族学からのアプローチがされている。又、長崎注21に諸研究がまとめられている。

34、南信地方に一般的にみられる。

35、原嘉藤・藤沢宗平　編　『唐沢・洞』　一九七一年　長野県考古学会。

36、クロード・レヴィ＝ストロース　「家族」『文化人類学リーディングス』　原ひろ子訳　一九六八年　二五頁　誠信書房。

37、クロード・レビィ＝ストロース注36　二五頁。

38、藤森栄一　「14池袋・曽利遺跡」『井戸尻』　一九六五年　中央公論美術出版。武藤雄六・他　『曽利』第三、四、五次発掘調査報告書　一九七八年　長野県富士見町教育委員会。

39、大場磐雄・永峯光一・小出義治　編　「鶴川J地点」『鶴川遺跡群』一九七二年　鶴川遺跡調査団。

# The structure of *Umegame* group and the marriage system in those days

Yuichi NIWA

**Summary**

This paper deals with the structure of the group who built *Umegame* (buried pottery) and the marriage system of those days by analyzing the method of the construction of indoor-type *Umegame* found in the ruins of the latter half of middle-jōmon age located in the area of the Tenryu river system.